パンデミック時代のエレジー

21 世紀のアメリカ詩に関する暫定報告

古村敏明

発表趣旨

9.11 の惨劇の後、“war on terror” が拡大していった 2004 年に出版された著書、*Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence* の一節で、Judith Butler は、“loss makes “a tenuous ‘we’ of us all” と述べ、喪失に対する感情としての grief（悲嘆）が、人と人との繋がりを、より強く私たちに意識させる作用を描写する (Butler 20)。Grief の表現媒体としてのエレジーは、旧来より、親しい人の死などへ対する私的悲嘆を、自分が属するコミュニティと共有する公的追悼へ昇華する機能を担ってきた。特にアメリカ文学史において、その初期からエレジーが共同体を想像・創造する役目を帯びていたのは、Max Cavitch が *American Elegy* で論じているとおりである (Cavitch 24)。新しい国を創立する過程で共同体を夢想したピューリタンの詩、George Washington の死後も新設された国家が空中分解しないことを願うエレジー、多数の死者を出した南北戦争を経て分裂したアメリカの統合と救済を切望する Walt Whitman らの詩、そして、20・21 世紀でも、より inclusive な共同体を目指してマイノリティの過去と現在を綴る詩や、9.11 直後に人々の「心の救急隊員」的な役割を果たすために―ニューヨーク市の消防署長が、Thank you for the food and the blankets and the flowers but please—no more poetry と声明を発したほどに―アメリカ中にあふれた詩、などが示すとおり、公的悲嘆による共同体の形成・確認という機能を、エレジーは歴史的に求められてきた。再び他者の大量死が現実となった今、Covid-19 時代において、アメリカ詩のエレジーは何の悲嘆を、どのように追悼するのか？2020 年に出版された Alice Quinn 編集の *Together in a Sudden Strangeness: America’s Poets Respond to the Pandemic* に収録された作品を中心に、21 世紀のアメリカ詩が、パンデミック時代に対し現在進行形でどのように反応しているのかを、本発表は考察する。

悲痛と追悼：隔絶された世界で共に生きること

Together in a Sudden Strangeness から見えてくるのは、パンデミック下での共同体における共有体験と、その集合的トラウマである。9.11 直後と同様、「心の救急隊員」的役割を求められて 2020 年春に書かれた作品が大部分を占めるこの詩集では、当時の、ロックダウン下での自宅待機生活の日常と異形が、細やかに描写される。感染症への抵抗力が低い人たちの保護を目的とした高齢者対象のショッピングアワー、視聴者が増えたネットフリックスや CNN、窓から見える外の様子、など、隔離生活の断片を描いた作品が、それらの体験を collective memory へ昇華する。それと同時に、そのような優雅とも言えなくはない隔離生活とは異なる生活も、このパンデミックで発生しており、人種や階層、居住地域、政治思想などによって生きる現実が異なる、社会分断も深刻化していった。その lived experience の差異から、パンデミックが、危機であること自体認知共有されない危機へと発展し、大統領選挙の年であったことも相まって、社会分断が認知の非共有を促進させたことも、周知のとおりである。この複雑性を反映してか、Alice Quinn のアンソロジーにも、正統派エレジーの技法と慣習を踏襲して悲痛を表現し追悼を試みる作品と、反エレジー的な怒りや慰めの拒絶を表現する作品が混在している。そして、これらの作品で表現される悲痛や追悼の対象は、身近な者の死もしくは個人的に身近でなくとも同じ共同体に属する者たちの死、といった「死」にとどまらず、パンデミックによって失われた日常、直接見ることができなくなった孫の成長などの同居家族以外との繋がり、人種・階層・地域・政治思想などによって分断され霧消し、9.11 のときのように復元される兆しが見えない、共同体の一体性の幻想、など、多岐に渡る。

本発表にて考察した作品群を大まかに特徴づけるとしたら、(1) 正統派エレジー的に、追悼と慰めを表現する作品（Rachel Eliza Griffiths, “Flowers for Tanisha”）、(2) 戦争詩のように、前線での苦しみを描写する作品（Amit Majmudar, “An American Nurse Foresees Her Death”）、(3) 孤立・隔離状態において、近しい存在とは限らない他者に対し、どのような弔意を持ちえるかを問題提示する作品（Edward Hirsch, “Eight People”）、(4) 概念化しづらい「失われた喪失」を新フロイト精神分析理論の「亡霊」の概念に類似するかたちで表現する作品（April Bernard, “Haunt”）、(5) 過去にも現在にもパンデミックを含むその他多くの問題を無視してきた不合理な社会を批判する作品（Linda Gregerson, “If the Cure for AIDS,”）、(6) あまりに大きな悲痛を前に、共感疲れから思考や感情を閉ざすかのような作品（Susan Kinsolving, “My Heart Cannot Accept It All”）、などに分類できる。

パンデミックと社会分断

このパンデミックの一つの特徴は、人種や階層などによって生きる現実が異なる、という事実が可視化され

たことである。多民族国家において、人種とは、差別や偏見などの「問題」を考える以前に、目の前にある「現実」であり、この「現実」を見ない行為は、Anne Anlin Cheng が論じるところのメランコリーを生み出す (Cheng 11)、というのが本論の理論前提であるが、その「現実」を描く作品を 2 編、論考する。Sally Wen Mao は、奇しくも新型コロナウイルスの発生地と目される中国の Wuhan の生まれの詩人だが、彼女の詩、"Batshit"では、パンデミックの中で行き場がない怒りを向けられたアジア系アメリカ人の体験が綴られる。詩の冒頭から、アジア系アメリカ人に向けられた蔑称が列挙され、犬の肉を食べる文化の揶揄、ブルックリン在住のアジア系女性がゴミ出しのときに酸を顔に浴びせられる事件、といった、パンデミックによって先鋭化したアジア系への精神的・身体的暴力が描写される。Covid-19 で顕現化した「アメリカ」とは、危機に面したときに人種の垣根を越えて団結する共同体ではなく、社会分断化により個々人が別々の現実を生きるようになり、そこには埋め難い溝が存在することを、Mao は示唆する。この詩のタイトル自体も、新型コロナウイルスの媒介動物とされる蝙蝠の排泄物、という意味のみならず、「でたらめ」という意味を持つ、あまり上品ではない言葉だが、上品な言葉では表しきれない「でたらめ」な状態の社会への嫌悪が、悲しみを凌駕していることが伝わってくる。

もう 1 編、Claudia Rankine の"Weather"は、パンデミック社会の歪みと、日常的レイシズムの歪みの合流を描く。パンデミック初期の犠牲者の多くは、隔離生活をできる立場にいない essential workers と呼称された人たちであり、その相当数は黒人系であったことから、黒人であることを「既往症」と Rankine は皮肉を込めて風刺する。この詩の主題である、2020 年 5 月末に起きた警察官による George Floyd の殺人は、すでに存在していた人種的抑圧の土壌の上に発生した事件であった。パンデミックによってもたらされた死と、人種偏見によって引き起こされた死が重なり、抗議運動と発展し、それが体制側からのさらなる暴力で応酬され、その帰結として暴動が発生する、社会的「暴風雨」の中、その荒天に立ち向かう意思を、Rankine の詩は宣言する。Rankine は、数々の賞を受賞した *Citizen: An American Lyric* で知られるように、ジャンル越境性や、断片引用の手法に定評がある詩人であるが、この詩の断片引用の一つである、"*white silence equals violence*"というフレーズからは、The Emancipation Proclamation, *Brown v. Board of Education*, The Civil Rights Act of 1964 など、真の equity を求めてきた歴史的潮流に反し、本質の部分で理想と現実の乖離がなくならないアメリカへの怒りが垣間見える。

結論

本発表の結論は、現在進行形の事象についての暫定的なものにしかなりえないが、あくまでファーストテイクとして述べるなら、Covid-19 時代のアメリカ詩におけるエレジーは、「ダイバーシティ」という概念に対する受容と反動の間で揺らぐ社会の現状を受け止めたうえで、sensibilities の多様性に積極的に形を与えようとする試みであると言える。追悼による慰めを探求する正統派エレジー、救済を求めずに惨状を描く現代戦争詩に近い作品、孤立・隔離の中で他者との関係性を築く試みとその困難さを描く詩、言葉にできない喪失感を「亡霊」の形で表現する詩、倫理的思考に基づく社会批判の詩、アンチ・エレジー的に慰めを忌避する詩、そして、マジョリティの人たちが認知しない社会分断化のメランコリーを言語化しその現実に抵抗するの詩、等々を見てきたが、これらの詩は、言葉がどのように人を救えるのか、様々な手法で実験している。一般的に、悔やみの言葉が定型的なのは、喪失の悲痛に対する慰めの不可能性、そして言葉を探す負担から、疲弊した心を解放することも、癒しの一種だからである。定型句による負担軽減が癒しとして機能しなくなったとき、反エレジー的怒りや、慰めの拒絶、解決に至らないメランコリーなど、悲痛の概念や言語を様々な形で表し、従来の追悼の概念がその効力を失った空白を、この多様化が埋めていく、というのが、現代エレジーの大まかな図式である。哲学者 Judith Shklar は、アメリカの歴史とは、過去に疎外されていた集団が、共同体への入会を進歩的に求めていく物語であると述べるが (Shklar 3)、同様に、従来はエレジーで表現されてこなかった思考や感情が、進歩的に表現を求めていく試みが、アメリカ文学史におけるエレジーの物語であると言える。そして、この表現されない、認知されない感情を掬い取るエレジーも、癒しには必須である。なぜならば、悲劇や苦しみを体験した後の私たちの感情は、整ったものでもなければ、品位があるものとも限らず、これらの乱雑な感情にも、それらを受容する器が必要だからであり、その必要であり続ける器が、エレジーだからである。

引用文献

Butler, Judith. *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*. Verso, 2004.

Cavitch, Max. *American Elegy: The Poetry of Mourning from the Puritans to Whitman*. U of Minnesota P, 2007.

Cheng, Anne Anlin. *The Melancholy of Race: Psychoanalysis, Assimilation, and Hidden Grief*. Oxford UP, 2001.

Quinn, Alice, ed. *Together in a Sudden Strangeness: America's Poets Respond to the Pandemic*. Alfred A. Knopf, 2020.

Shklar, Judith N. *American Citizenship: The Quest for Inclusion*. Harvard UP, 1991.